

生物学的自然主義

ジョン・R・サール 2004年

Biological Naturalism

By John R. Searle 4 October 2004

「生物学的自然主義」は伝統的に心身問題と呼ばれるものへのアプローチに私がつけた名前です。私がそれにいたった道は、私の普通のやり方です。哲学史を忘れるようにし、自分が知っている事実を思い出すことです。どんな哲学理論も、そういう事実と矛盾してはなりません。もちろん私たちが考えることは、変わってしまうかも知りませんが、最善の情報からはじめなければならないのは言うまでもありません。「生物学的自然主義」は精神状態一般の理論ですがこの本が意識についての本であるため、私は意識の理論としてここに述べたいと思います。

I. 科学的に洗練された常識としての生物学的自然主義

哲学的な心身問題の偉大な歴史について全然知らないと思ってください。けれども、普通の — ゾンビではなく、失語症や分離能や盲視やその他哲学者が好む病気にかかっている — 成人の精神生活をもっていると思ってください。また普通の科学の知識をもっていると思ってください。あなたは物質の原子論とか生物学の進化論を理解しており、神経生物学の基礎的知識を含む、動物の生物学についても何ほどこ理解しています。要するに、あなたはたぶん教育を受けた健康な成人と自分を想像するでしょう。あなたがおそらく確実にそうでないように、どんな哲学史の知識も持っていないと想像するでしょう。では自分で意識の本性とその脳との関係を描くと自問してみてください。あなたは、あなた自身の経験から意識の本性を知っています(ただし「内観」ではありません。それはすでに哲学的に長い歴史を持ちます)。そしてその脳に対する一般的な関係は、あなたが神経生物学について知っているものと同様、自然一般について知っているものに適合しなくてはなりません。あなたはどんなことを思いましたか？

さて、デカルトや二元論や唯物論や他のあなたが提案するのに非常に似ていると私が考える有名な災いについてはすっかり忘れることができるなら、私が思いついたのはこうです。第一に、意識の実用的な定義が必要です。研究のターゲットを決めるのに十分であればよく、なにか素晴らしい必要はありません。意識は人が気づいている状態のすべてからなると、私なら言います。気づいていることは厳しすぎるかもしれないので、意識のすべての形式を確実にカバーするようにします。気づいていること、感覚、感じを加えます。そして具体的な現実に結びつけることで、私はその定義に索引的要素を与えます。わたしはこう言います。意識状態とは、睡眠の暗闇から目覚めた朝始まり、眠りにつくまで、あるいは「無意識」になるまで一日中続く、気づき、感覚、感じのような状態です。この定義では、夢は、普通の、目覚めている時の意識とは全然違いますが、意識の一形式です。

一般的な用語でターゲットを定めたなら、つぎはその本質的特徴を特定する必要があります。つぎがその4つのもっとも重要な特徴です。

1. 意識状態は、なんらかの意識状態にある質的感じがあるという意味で、質的と定義されます。

これは「のよように感じる」という意識の特徴です。たとえばビールの味はベートーベン交響曲第三を聴くのは質的に違います。一部の哲学者はこの質的特徴を語るために「クオリア」という用語を使います。けれど意識とクオリアは同じ広がりをもっているため、別の表現をあえて付け加える必要はありません。すべてのクオリアは意識状態です。すべての意識状態はクオリアです。この点を起点に打ち付けるのは大切です。質的な状態と非質的な状態の、ふたつの種類の意識状態はありません。すべての意識状態は質的です。

2. このような状態はまた人間や動物の主体が経験する限り存在するという意味で存在論的に主観的です。

この意味でわたしの窓の外にある木は、客観的存在論をもってますが、その木の私の意識的視覚経験は主観的存在論をもってしています。客観－主観の区別は曖昧で、先に進む前に曖昧さを取り除く必要があります。第一に、主観－客観の区別には認識論的意味があります。レンブラントは1606年に生まれたという主張は客観的事実の問題です。レンブラントはルーベンスより優れた画家だという主張は客観的事実の問題です。この認識論的意味での客観と主観は主張の特徴です。しかし認識論的意味に加えて、その区別の存在論的意味があります。山、分子、大陸プレートのようなほとんどの物は、どんな経験的主観とは独立して存在します。それらは、客観的あるいは三人称の存在論をもちます。痛さやくすぐったさ、かゆさは人間や動物の主体が経験するときしか存在しません。そしてそれらは主観的あるいは一人称の存在論を持ちます。意識は人間や動物の主体が経験する場合にしか存在しないという意味で存在論的に主観的です。存在論的に主観的な領域について認識論的に客観的知識をもつことができることを強調するのは大切です。存在論的に主観的な意識の認識論的に客観的な科学が不可能なのはこの理由のためです。

3. さらに重大な事実、すべての意識的生活のどんなときも、あなたの意識的状态は、唯一の統一された意識フィールドで経験されるということです。

どんなときもあなたの意識的状态は、ひとつの大きな意識的状态の一部です。木の視覚経験、私の手の下の机の触覚経験、窓の外の月の光景は単一の総合的な意識経験の一部です。しかし世界の他の実体はそうではありません。木、机、月は単独の総合的な大きなものの一部という形では存在しません。

特徴1－3、質、主観性、統一性は別々に、独立してはありません。ある状態にとって、この意味で質的であることは、それが主観的だということを含意します。ある状態にとって、質的で主観的であることは、たとえそれが統一されたフィールドのたったひとつでしかないとしても、質的主観性の統一されたフィールドの一部だということを含意します。あなたの現在の意識フィールドが7つの部分に分離すると想像しようとすると、7つに分かれたひとつの意識フィールドを想像するのではなく、7つの別々の意識フィールドを想像するに自分に気づくでしょう。

4. すべてではありませんが、ほとんどの意識的状态は、哲学者の言い方で志向的であるといえます。それはモノや事態について、モノや事態を指示するということです。

私たちは意識の歴史について忘れましょと言いました。私は、自分たちが知っている事実だけ述べます。「志向性」とは堅牢な歴史をもった言葉です。そのためできるなら歴史のことを忘れてください。（「志向性は心の印である」とかその他多くの誤りを忘れてください）。私ののどの渇き、空腹、視覚はすべて何かに向かうものです。この意味でそれらは志向的であると名付けるのにふさわしいのです。幸せだとか不安だとかか不特定な感情は、志向的ではありません。

そこで私たちはその特徴の本質の一部を定義し記述しましょう。何かもつと言うことができますか？さて気をつけるなら、いくつかの可能なミスリードを予め防ぎたいと思います。私たちは次のことを付け加えたいと思います：そのように定義された意識は自己意識を含みません。あなたは、何かに意識していることについて高次の意識を持つことなく、意識することができます。また、ファーストオーダーの意識をするため一般的なセカンドオーダーの意識を必要としません。

あなたは痛みを感じているという事実を必然的に反省することなく、痛みを感じることができます。これまでターゲットを特定し、その本質的特徴を記述し、一部のミスリードを予防しました。これから私たちはどのように志向性が爾余の実在する世界に適合するかを語る必要があります。

1. 実在と意識の非還元性。定義した意識的状态は、実在する世界の実在する一部です。そして排除したり、何か他のものに還元できません。

しばしば、何か完全な因果的説明をする場合、一たとえば日没とか虹の場合に生じるように一私たちが幻覚として排除することができるのか、一たとえば個体とか液体の場合生じるような一なんらかのより基礎的現象に還元できると示すことができます。意識の場合それを排除も、何か他のものへの還元もできません。

私たちは何かについて認識論的基礎が幻覚であると示す場合、それを排除できます。夕方、太陽はタマルpais山に沈むように見えます。また虹を見ると、それは空にアーチを描くように見えます。けれど、両方ともその見かけは、もっと基礎的現象—太陽に相対的な地球の地軸の回転、水蒸気による光線の屈折—によって引き起こされる幻覚なのです。しかし私たちは意識にこのような排除的還元をしません。なぜなら認識論的基礎がそれ自体実在だからです。私が意識的であるように私に意識的に見えるなら、私は意識的なのです。私たちは自分の意識について多くの間違いをすることができます。しかし意識のまさにその存在が問題になる場合、見かけと実在の区別をすることはできないのです。なぜなら意識の存在の見かけがその存在の実在性だからです。

私たちは意識をより根源的な神経生物学のプロセスに存在論的に還元することはできません。というのも私がすでに述べたことで明らかな理由のためです。意識は主観的あるいは一人称の存在論をもち、意識の神経生物

学的因果的基礎は客観的あるいは三人称の存在論をもちます。あなたは一人称の存在論が三人称の存在論以外の何ものでもないを示すことができません。私は後でこの点についてくわしく述べるつもりです。意識の因果的還元可能性は私たちをつぎの論点に導きます。

2. 意識の神経生物学的基礎。すべての意識状態は低次の脳のプロセスによって引き起こされる。

私たちは正確にどのように脳のプロセスが意識を引き起こすかについて詳しく知りませんが、それが事実であることに異論の余地はありません。のどの渇きから、神秘的な恍惚感まで、すべての意識状態が脳のプロセスが引き起こすというテーゼは現在非常に多くの証拠で圧倒的に確立されています。事実、生物科学における現在の最もエキサイティングな研究は、正確にどのようにそれが働くかを解決しようとしています。意識の神経的相関物とはなにか？どのようにそれは意識状態を引き起こすよう機能するのか？

脳のプロセスが意識を引き起こすという事実は、脳だけが意識的でありえるということを含意しません。脳は生物学的機械であり、私たちは意識的である人工的機械を作ることができるようになるやもしれません。ちょうど心臓が機械であるように、私たちは人工心臓を作りました。私たちは正確に脳がどのように意識的に働くか知らないで、いまだそれをどのように人工的に作るかわかる立場にいません。

3. 意識の神経生物学的実現。すべての意識状態は脳において高次のあるいはシステムの特徴として実現されます。

実在的存在を持つすべてのものは単一の時空に継起し、意識の実在的存在は人間や動物の脳にあります。けれど、意識経験は個々のニューロンやシナプスのレベルには存在しません。たとえばあなたのおばあさんのことを考えることは、ニューロンの発火によって引き起こされますが、それは個々のニューロンのレベル以上の高次のシステムの特徴として脳に存在します。

4. 意識の因果的効果。実在する世界の実在する一部としての意識は因果的に機能します。

たとえば通常、腕を上げる意識的決定をし、私の腕が上がる場合、私の決定が私の腕が上がることを引き起こします。すべての身体的なシステムと同様に、脳は説明の様々なレベルを許容します。そして、その全ては全く同一の因果システムの因果的に実在するレベルです。だから、自動車のエンジンを、ピストンシリンダーと点火プラグの発火のレベルで記述することができ、また炭化水素分子の酸化と金属合金のレベルで記述できるのとちょうど同じように、腕を上げる意識的な行為中の意図と対応する身体運動のレベルで私が腕を上げることと記述できますが、ニューロンのシナプスの発火のレベルで、また私の運動ニューロンの軸索終端におけるアセチルコリンの分泌のレベルでそれを記述することができます。脳のケースと自動車のエンジンのケースの両方で、これらは別々の因果構造ではありません。それは異なるレベルで記述される同じ因果構造です。同じシステムが、競合しない、あるいは別個でない記述の異なるレベルというより、単一の統一された因果システム内の異なるレベルをもつことを理解するならば、脳が異なる記述のレベルをもつという事実は、他の身体システムが異なる記述のレベルをもつより神秘的であるということはありません。

私は意識の短い定義、その重要な特徴の構造の一部の短い説明、そして脳や他の実在する世界の部分へのその関係の一般的陳述をしました。ひとつのレベルで、これは伝統的な心身問題のひとつの解決案、あるいは願うべくはその消滅になります。私が進めてきた主張は、適切に理解されるなら、現在の科学的常識の問題です。ささやかな科学的知識をもち、伝統的哲学的カテゴリーから自由なら人が言うだろうことを私は考えているのです。私の考えを進める中、もはや伝統的哲学的ボキャブラリーを使わなかったことに注意してください。二元論、唯物論、随伴現象説、デカルト主義、その他爾余のすべてのような有名な理論や問題にも言及しませんでした。いわゆる「科学的世界観」を真面目に受け取り、哲学史を忘れるなら、私が進めた主張は、あなたが到達するものであると私は思います。

名前が必要なので、私はこの主張を「生物学的自然主義」(Biological Naturalism)と呼びました。「生物学的」であるは意識のまさに存在を説明する正しいレベルが生物学的であることを強調するためです。意識は人間や高等動物に共通の生物学的現象です。私たちはどれほど系統発生的スケールを下ればよいのかわかりませんが、それを生み出すプロセスが脳の神経的プロセスであるということはわかっています。「自然主義」というのは、意識が光合成、消化、有糸分裂のような他の生物学的現象とともにある自然界の一部であり、意識を説明するのに必要な説明的装置は、いずれにしろ自然の他の部分を説明する必要があるものだからです。時には哲学者は意識や志向性の自然化について語りますが、「自然化」と言うことによって、彼らは普通意識の一人称のあるいは主観的存在論を否定することを意味しているのです。私の主張では、意識は自然化を必要としません。意識はすでに自然の一部であり、主観的質的生物学的部分として自然の一部なのです。

私が抽象的でエーテルのような何かについて話しているのではないことを示すため、実生活の一例で議論全体を明らかにさせてください。まさに今、私は冷たいビールを飲みたいという意識的欲求を感じています。この欲求は、幻覚であることを示されることも、何か他のものに還元されることもできないという意味で、この欲求は現実的です。この欲求は一人称の存在論をもつという意味で主観的です。そしてそれに質的感覚を持つという意味で質的です。またビールを飲むことを対象にした、あるいはビールを飲むことについてであるという意味で明確に志向的です。さらに、それはその瞬間の私の意識フィールド全体の一部として起こります。わたしの欲求の今の感じは脳のプロセスによって完全に引き起こされます。それは脳に場所を持ち、今すぐ冷蔵庫に行き、一杯の冷たいビールを自分自身に注ぐよう、私に動機づけることによって因果的に機能するでしょう。

II. 哲学的伝統の視点からの生物学的自然主義の反論

この意識の説明がほとんど述べるに値しないほど明白だと思うなら、あなたはすでに健全な生物学的自然主義者です。だからおそらくここで読むのをやめてかまいません。しかし生物学的自然主義が現代科学の常識であると私は思いますが、心身問題を論じる偉大な哲学的伝統の一部またはすべてを受け入れる人たちはお決まりの挑戦をします。そして私は生物学的自然主義の理解を困難にするその伝統の諸要素を解決する必要がまだあるのです。

これらの事実に目を閉ざさせるその伝統は、私たちの文化、大衆文化と学術哲学の両方に広く深く埋め込まれています。私はそのすべてを明らかにし、解答することはできませんが、中心的な点を拾い出そうと思います。わたしの戦略は生物学的自然主義に一連の反論をすることで、伝統のある誤謬の要素を放棄した場合、どのようにそれらに答えることができるかを示すことです。

異論1. あなたは両方を持つことはできない。あなたは意識が普通の生物学的プロセスであるから、意識の唯物論的説明をもっているが、同時に意識が非還元的に主観的だと主張する。それはあなた意識の二元論をもつことを意味する。あなたは唯物論者か二元論者でなければならない、あなたは両方を回避したり、両方であるよう偽って主張することはできない。

異論1への回答。反対1は精神と身体間の本物の区別の含意の誤った概念に基づいています。伝統的仮説は普通理解されるように、心と体が相互に排他的な形而上学的カテゴリーだと示します。何かが精神的なら、それはすべての点で身体的ではありえません。身体的なら、全ての点で精神的ではありえません。これは最も深刻な誤りです。そして唯物論者と二元論者はそれを共有しています。二元論者は、意識の実在性と非還元性を尊重するなら、二元論を強いられると考え、唯物論者は宇宙の科学的自然主義的概念を受け入れるなら、意識の実在と非還元性を否定するよう強いられると考えます。彼らはともに何か正しいことを言おうとしています。がなにか間違ったことを言って終わります。私たちが無意識的精神状態についてなにか特別な問題を捨てれば、つぎの表で伝統的な図式を明確に示すことができます。伝統的な概念では何かが精神的なら、それは左、身体的なら右の特徴を持ちます。

- | 精神的 | 身体的 |
|-----------------|------------------------|
| 1. 主観 | 客観 |
| 2. 一人称の存在論 | 三人称の存在論 |
| 3. 質的 | 量的 |
| 4. 志向的 | 非志向的 |
| 5. 空間的位置を持たない | 空間的位置を持つ |
| 6. 空間的に広がりを持たない | 空間的に広がりを持つ |
| 7. 物理的プロセスで説明不能 | マイクロ物理学プロセスの因果的説明可能 |
| 8. 身体に因果的に作用不可能 | 因果的に作用し、システムとして因果的に閉鎖的 |

この表は、哲学的伝統における最も深刻な誤りのひとつを具現しています。そしていったんそれを裸にすれば、あなたはその誤りを理解することができます。左の列の初め半分の1-4は、残りの半分5-8を含意しません。意識は実際1-4です。意識は非還元的に主観的でその意味で一人称の存在論をもちます。すべての意識状態に質的感覚があるという意味で質的です。意識は多くの場合に本来的に志向的です。しかし意識は5-8の

特徴を持ちません。どのように世界が働くかについてなにか知っている限り、すべてのそのような意識状態は脳に空間的位置を持ちます。(最近のイメージング技術で私たちはその位置と空間的次元について何か発見を始めています)。意識状態は完全に脳のプロセスによって引き起こされ、身体システムの他の高次特徴のようにそれは因果的に機能する能力があります。身体から区別されるも精神の伝統的概念は深刻な誤りを含んでいます。それは主観的、質的、一人称的、本来的志向性である、意識の本質は、他の身体とちょうど同じように、空間的な位置、広がり、因果関係を持つ身体的世界の通常の一部であることを妨げません。

伝統的な心身問題を克服する第一の最も重要な段階は、意識の本来的特徴、その主観性、一人称的存在論、そして志向性が、世界の生物学的特徴であること、それゆえ、脳に空間的に位置を持ち、脳のプロセスによって引き起こされ、それ自体、他の脳や身体のプロセスに作用する能力であることを妨げないということを認めることです。非還元的な精神(左欄1-4)は、まさにその点で、身体的(右欄5-8)なのです。しかしそのぼキャプラーが非常に哲学的に墮落したため、私は「精神」と「身体」という伝統的ターミノロジーを放棄して、単に意識は脳システムの高次の生物学的特徴であると言うことを薦めます。

これはこの記事で伝統に対して行おうとしているもっとも重要な異議です。意識の本質的特徴はその生物学と決して矛盾することはなく、それゆえ三次元の経験的現実の因果の一部なのです。

異論2. 生物学的自然主義は随伴現象説を回避できない。物理的宇宙は「因果的に閉鎖的である」。そして意識が物理的ないし物質的宇宙に還元不可能なら、その場合意識は物理的宇宙になんら因果的影響を持つことができない。

異論2への回答。それは随伴現象説であるようにすら見える二元論的カテゴリーを受け入れる誤りのためです。通常、たとえばハンマーの固さのようなシステムの高次の特徴は、たとえ高次の特徴がそれ自体感にミクロ的要素のシステムによって引き起こされ、実現されるとしても、因果的に機能します。爪をハンマーで打つとき、実生活にいとしたら、重さ、固さ、速さのレベルで因果的ストーリーを語るすることができます。しかしマクロの力がミクロの力になるとき、そのストーリーは分子レベルにおける、分子とエネルギーの転移のレベルで語られることもできます。これらはふたつの独立したストーリーではなく、異なるレベルのひとつの連続した因果システムにおける記述なのです。清き心を持つ人はだれも、固さがミクロ物理学的説明を根拠とする随伴現象だとは言わないでしょう。正確な類比として、あなたが腕を上げると決める場合、あなたは志向性と身体運動のレベルでストーリーを語るすることができますが、またミクロレベルで、すなわち運動皮質におけるニューロンの発火と運動神経の軸索終板におけるアセチルコリンの分泌のレベルでもストーリーを語るができるでしょう。これはふたつの独立したストーリーではなく、ひとつの連続した因果システムの異なるレベルでの記述なのです。デカルト主義のカテゴリーの虜になっていない人なら誰でも、随伴現象主義について問題があるとは考えずらしないでしょう。

異論3. あなたの説明は自己矛盾であるようにみえる。それは還元論なのかそうではないのか？あなたの説明では、意識は明らかに因果的に還元的である。なぜなら意識は完全にニューロンのプロセスによって引き起こされ、ニューロンのプロセスの因果的力を超える因果的力を持たない。だが同時にあなたは因果的に還元可能だと認めながら、それは存在論的に還元可能であることは否定する。あなたは意識が物理的プロセスに還元しうることを否定し、かつ古臭い二元論のように意識は物理的ないし物質的プロセスを「超えた何か」だと主張する。

異論3への回答。異論3は還元論についての誤りに基づいています。ひとつの重大な点で、固さの類比は不正確です。固さは存在論的に分子運動に還元することができますが、意識はニューロンの振る舞いに還元することができません。この点をもっと正確にするため、ミクロ物理学プロセスとの関連で固さの完全な因果的説明を与えることができるという事実は、固さは何物でもなく、ある種のミクロ物理学的現象にほかならないと言う結果になります。因果的還元は存在論的還元です。しかし意識の場合は、存在論的還元をすることは言う気はありません。意識は完全にニューロンの振る舞い似よって引き起こされますが、やはり意識はニューロンの振る舞い以外の何物でもないという気はありません。なぜでしょうか？固さの場合、私たちは表面的特徴—どれくらい物が固く感じられるか、すなわち圧力に抵抗するか、他の固い物が突き通せないか—を固さに本質的とはみなしません。そのため、私たちはそれを無視して棚上げし、表面的特徴のミクロ的原因との関連でそれを再定義し直します。因果的還元は再定義による存在論的還元のことです。この還元は表面的特徴は存在せず、固さの本質から単に取り除くだけだとことを示すものではありません。ではなぜ私たちは意識にそうすること—意識状態が感じるようなものの表面的特徴を無視し、ミクロ的一原因との関連で意識状態を再定義すること—ができないのでしょうか？私たちは、もし十分知ったなら、何らかの目的のため、医療の目的のため言うことができるでしょう、できるかもし

れません。その場合。「この男は痛みを感じる、たとえ彼がまだそれを感じていなくても。視床皮質システムがはっきりと感じられていなくても痛みの現前を示している」ということができるでしょう。ちょうどそれは「ガラスは本当は液体だ、たとえ表面的に個体のように見え、感じるとしても」と今度は言うことができるように。しかしたとえ還元をしたとしても、なお個体の表面的特徴に名付けるボキャブラリーが必要なように、一人称の主観的質的特徴に名付けるボキャブラリーが必要でしょう。なぜなら意識状態を議論するための概念装置をもつことの肝心な点のすべては、一人称の存在論を記述するためなので、私たちはこの存在論を無視し、三人称の因果的基礎との関連でその概念を再定義する気にはならないのです。意識の場合、因果的還元は、再定義による存在論的還元にはなりません。なぜならその再定義は最初の概念を持つことの肝心な点を取り除くだろうからです。

以前の著作で、私は意識の非還元性は、私たちが定義を行う些細な結果だと言いました。その見解は広く誤解されました。そして私は誤解はおそらく私の過失だと考えています。だからそれをこの場ははっきりさせたいと思います。意識がほとんど完全に三人称の現象からなる、つまりマイクロレベルで、実際、世界が完全に力の場における三人称の物理学的粒子から構成される世界において一人称の現象として存在すると私が考えることを認めてください。その場合、なぜたとえば液体性、個性、色彩のような仕方で意識は還元可能ではないのでしょうか？さて全理論的にいわば色彩のようなケースで還元を見るなら。私たちは色彩をどのような物にみえるかに関連して定義しました。赤さは、標準的な環境の下、標準的な観察者にとって赤く見えるものと定義されます。それは循環論のように見えますが、赤さは明瞭に定義することができ、「標準的観察者」について非循環的な説明をすることができるためそうではありません。しかしいったんわたしたちが赤さの経験の因果的基礎を発見するなら、通常その経験を生む反射との関係で色を再定義することができます。私たちは色彩の経験を無視し、それを棚上げして、その因果的基礎との関係でその概念を再定義再定期します。因果的還元は主観的要素を無視し、再定義することによって存在論的還元を行います。さてすでに論じた通り、私たちは最初に概念をもつ視点を失うことなく、意識を扱うことが本当にできません。だから意識と色彩の非対称性は宇宙の基本的構造における非対称性ではありません。反対に、ふたつのケースは対照的です。色のついたもの物理学は、私たちの身体特性とともに、色彩の経験を持つことを私たちに引き起こし、私たちの脳の物理学は、脳のその生物学的特性とともに意識一般の経験をもつことを私たちに引き起こします。しかし私たちは意識のケースでする気にはならない仕方で色彩のケースでは還元する気になります。なぜなら還元をするなら、色の概念をもつ視点を失わない仕方では、意識の概念をもつ視点を失うだろうからです。それが私が意識の非還元性が定義を行う上での些細な結果であるといったとき言おうとすることです。しかしこの主張は非常に多くの誤解を生んだのでそれを撤回し単に事実を記述するだけにした方がいいと思います。

異論4。あなたははまだ矛盾を犯している。あなたは意識は脳のプロセスによって引き起こされると言う。しかし意識が脳のプロセスによって本当に引き起こされるなら。その場合実際ふたつの異なるものをその場合なければならない。原因としての脳と結果としての意識である。そしてそれは二元論である。

異論4への回答。異論4は因果関係についての誤りに基づいています。私たちは因果関係は常に時間に秩序付けられた個別の出来事間の関係であり、すべての単一の因果関係はつねに宇宙の因果的規則性の具現化であるとヒュームに教えられてきました。因果関係の多くは、そのようですがすべてではありません。多くの因果的力は時間を通じて持続的です。たとえば重力。なぜこのテーブルが床に力を及ぼすかの因果的説明は。重力ですが、重力は個別の出来事の持続からなるものではありません。多くの因果関係はボトムアップであり、結果と同時です。たとえば、なぜこのテーブルが物を支えるかについての因果的説明はマイクロ粒子の振る舞いに関連します。しかしなぜテーブルがものを支えるかについての因果的説明は、最初のひとつの出来事、分子運動を特定し、その後の出来事、ものを支えることを特定することによっては与えられません。むしろふたつは同時です。同様になぜ私の脳は意識が現前する状態であるかについての説明は、仮定するなら、莫大なシナプスにおける同期するニューロンとニューロンの発火が関係するものです。しかしこれは第一に脳が何らかの仕方で振るまい、その後意識が存在することを必要とするのではなく意識状態はニューロンの発火と銅に実現されることを必要とするということです。

III. 結論

私は二元論も唯物論もともに何か真なるものを言おうとしていると言いました。しかし哲学的伝統のため、それらは何か偽であることを言って結論します。どの部分が偽でどの部分が真なのでしょうか？二元論は正しく意識

は実在世界の実税的特徴であり、いずれも排除も他の何かに還元もされないと言います。しかし誤って意識は私たちがみな生きる物理的世界の通常の一部ではなく、それは別の形而上学的領域に住むと言います。唯物論は正しく、宇宙は完全に力の場の物理学的粒子(あるいは究極的に真である物理学理論が言うものがなんであれ宇宙の基礎的構成要素)からなると言いますが、誤って還元不可能で、主観的で、質的精神的現象としての意識は存在しないと言います。生物学的自然主義を理解するひとつの方法は、偽であるものを捨て去りながら、それぞれ真であるものを維持する試みとして理解することです。それを行うためには、私たちは一群の強力な哲学的前提を放棄しなければなりません。

意識が存在し、それがニューロンの発火によって引き起こされ、それが脳に存在し、有機体の生活において因果的機能を持つことを知っているという事実と様々な哲学理論の間で選択をするなら、私はいつでも事実を取るでしょう。さらに私は長年の経験で、事実をもっともっと時代遅れになるようにみえるだろう理論を克服するという事に自信をもっています。フランス・クリック、ジェラルド・エーデルマン、クリストフ・コッホのような私の知り合いの現役の神経生物学者たちが、影に日向に私が生物学的自然主義と読んできたもののあるバージョンを受け入れていることは指摘する価値があります。彼らは意識の説明を見出すために脳の活動を研究します。「生物学的自然主義」が一般的にアカデミックな学者たちに受け入れられるにはおそらく長い時間がかかるでしょう。なぜなら私たちはこれが不可能な困難さをもった哲学的問題であるという誤った主張を自分の学生たちに教えてきた長い伝統を追いかけるからです。しかしどのようにニューロンのプロセスが意識状態を引き起こすことができるかについて、ひとつの不可能な神秘があると考えるよう私たちの学生を訓練しなければならないことに注意してください。それは自分の経験や脳の活動の研究から当然帰結するという主張ではありません。いったん伝統の誤りを克服するなら、私は事実は自然に適切な場所を見つけると私は考えます。